

水稻新品種「やまのしずく」の栽培法

古川農業試験場

1 取り上げた理由

平成18年度に本県水稻奨励品種として採用された早生のうるち品種「やまのしずく」（系統名「東北177号」、普及に移す技術第82号）は、良質・良食味で、耐冷性も“極強”であることから、山間高冷地でも良食味米が生産できると期待されている。そこで、「やまのしずく」を安定生産するための栽培法について目安が得られたので、参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 追肥は、減数分裂期に窒素成分で2kg/10a程度とする。減数分裂期追肥では登熟歩合が向上して玄米千粒重も増加し、増収する。また、整粒歩合も高い（図1、表1）。
- 2) 幼穂形成期及び減数分裂期ともに追肥を行うと増収効果は大きいですが、整粒歩合は低下する（図1）。また、玄米タンパク含有率が高まり、乾物換算で8%（ひとめぼれではこの値を超えると食味が低下するとされる値）を超える（図2）。
- 3) 栽植密度18株/m²～22株/m²の範囲では、収量及び整粒歩合に差はみられない（図3）。

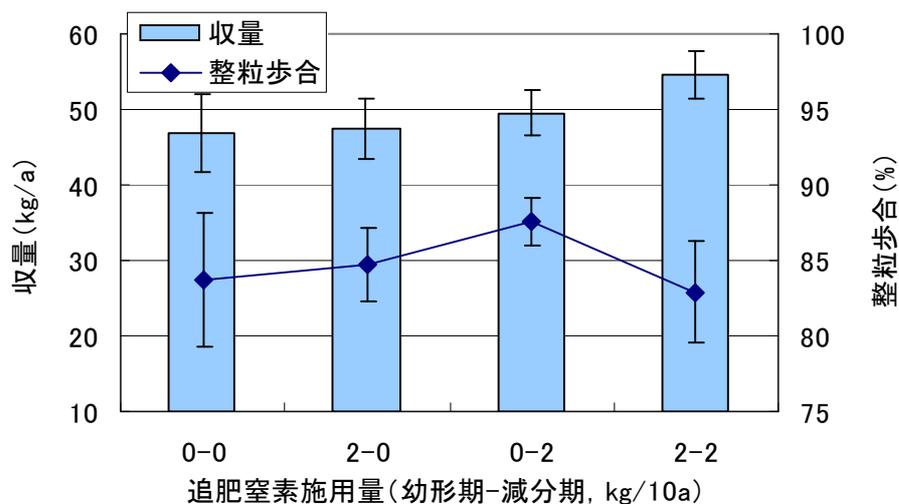


図1 追肥時期と収量及び整粒歩合の関係

注1) 平成19年、20年の平均値（図中のバーは標準誤差）。

注2) 収量は1.9mm以上の値（水分15%換算）。

注3) 整粒歩合は、穀粒判別器（S社製RGQI10A）で測定。

3 利活用の留意点

- 1) 本試験は大崎市鳴子温泉鬼首中川原地区（標高300m）で行っており、基肥は10a当たり窒素成分で6kgである。
- 2) 「やまのしずく」の特性については、普及に移す技術第82号を参照のこと。
- 3) ひとめぼれの玄米タンパク含有率（乾物）と食味の関係については、普及に移す技術第82号を参照のこと。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新品種栽培法の早期確立（やまのしずく）平成18年～20年度

2) 参考データ

表1 追肥区別収量構成要素及び品質

追肥窒素施用量 幼-減(kg/10a)	精玄米重 (kg/a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	粒数 (千粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	稈長 (cm)	穂長 (cm)
0-0	46.8	429	66.0	28.4	75.2	21.8	72.3	17.4
2-0	47.5	409	68.7	28.1	76.1	22.1	71.9	18.0
0-2	49.5	410	68.7	28.0	78.7	22.6	69.9	18.0
2-2	54.6	437	73.9	32.2	75.3	22.6	74.4	19.1

追肥窒素施用量 幼-減(kg/10a)	タンパク 乾物(%)	未度値	整粒歩合 (%)	外観品質 (1-9)
0-0	7.5	80.8	83.8	3.9
2-0	7.8	79.1	84.7	3.8
0-2	8.0	78.7	87.6	3.8
2-2	8.4	75.9	82.9	3.9

注1) 平成19年, 20年の平均値。

注2) 収量, 登熟歩合, 千粒重は1.9mm以上の値(水分15%換算)。

注3) 整粒歩合は穀粒判別器(S社製RGQI 10A), 玄米タンパク含有率は近赤外米食味品質分析計(N社製6500), 味度値はトーヨー味度メーター(MA90型)で測定。

注4) 外観品質は, 1(上の上)~9(下の下)の9段階で評価。

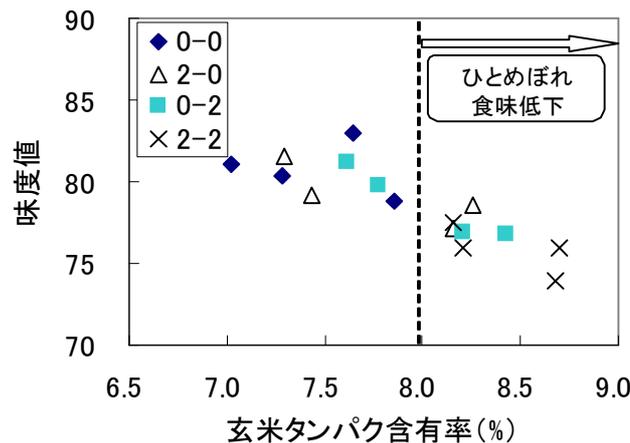


図2 追肥時期と玄米タンパク含有率及び味度値の関係

注1) 凡例は, 追肥窒素施用量 {幼形期-減分期 (kg/10a)} を示す。

注2) 平成19, 20年データ。 注3) 測定機器は表1に同じ。

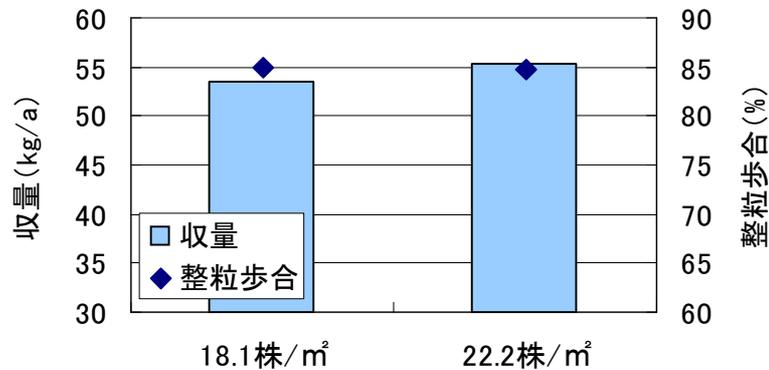


図3 栽植密度と収量及び整粒歩合の関係

注1) 平成20年データ(追肥窒素施用量: 幼形期0, 減分期2kg/10a)。

注2, 3) 図1に同じ。

3) 発表論文等 なし